

日本構想学会テーマ研究会 2025-1: 三木清『構想力の論理』の構想を構想するの会：活動報告

大会発表抄録
構想
 2025,volume11
 96 - 98

北京一（ん俱楽部 社会構想研究室）

KITA Kyoich (n club / Social Kohsou Laboratory)

2025年度の日本構想学会テーマ研究会において「三木清『構想力の論理』の構想を構想するの会」が設置され、4月27日、6月22日、8月24日、11月2日、毎回2時間、4回の定期例会を開き『構想力の論理』の『第一（序～第3章）』（1939）の内容にそくして論議した。

構想やその力について学ぼうとするとき、その古典的な基盤テクストのひとつは三木清の『構想力の論理』であるといえるだろう。すでに同書は今世紀に入ってからも大峯顕が『創造する構想力』の書名で復刻していた。数年前には岩波文庫でも2分冊で復刻されており、これらの事実はそのことの証左といえよう。

この研究会ではこのテクストの精読をもとにした要約ノートを研究会主宰者であった北京一が作成し、それを研究会参加者（永田徹、佐伯真一、猪岡武蔵）が共有しながらそれをつうじて、その著述内容に触発されながら、参加者各自の現在の問題意識に即した構想の展開を交わし合う時空を営んだ。すなわち、研究会の目的はテクスト読解というよりも、ひとつの読解結果に誘発されて参加者各々がもつ関心事にあらたな観点を見いだしそれを交流させ、そこからまた各自のあらたな発見につなげることにおかれた。これはその営み自体が三木が論じた構想力の自身の内から外への超越性に依拠するものであり、その生成された構想のかたちからの触発を受ける実践の試みとなった。よって研究会の成果はひとつには用いた研究会レジメ（北,2025）として、もうひとつには参加者各自の思考を拡延させていく悦びにあらわれることとなつた。

ところで、三木の同著作は1937年に中日戦争が勃発した年に書かれ始め、同戦争が泥沼化し国内の戦時体制が急速に徹底化していくなか、1年にわたり雑誌『思想』に書かれ、それ

がまとめられたものであった。上述のようにそれが現在の市場でも復刻されているという事実は同書のグレートブックス性を物語るわけだが、いざこれを手にとってみると、容易には読者を寄せつけない著述ぶりになっている。これは多くの人を惑わせることだろう。そして「やはりこれは哲学書なのだ」とうなずき棚上げすることにもなろう。

ただそうなりがちなゆえんは単にこれが哲学書だからというだけでなく、三木自身が同書で断り書きしているように、もともとこれは考えながら書くというスタイルで綴られたほとんど著者自身に向けたともいえる研究（のため）ノートであったという事情がある。さらには「論理」という書名とは裏腹に、論理的な文章構成や体系的叙述はこの覚え書きのあとになされる予定のことと割り切って書かれたためもある。だから彼のことばでいえば、本書はまずは現象学的なかたちで、つまり日常用語でいえば、既出の論の探索と発見、それらからの発想をそのままに書きついだものになっている。そのためいささか錯綜する叙述もあり、そこに読者の接近を困難にさせるもうひとつの理由がある。

もっとも、であるならこの段階で書名に「論理」を名乗るのは先走りではないかといわれよう。だが、彼としては叙述自体の論理性というより、まずは徹底して哲学、心理学、文化人類学といった関連諸分野の既存論考を渉猟し、それらからの引用を織り合わせることで諸論の筋を追って、構想力やそれに関わることがらのタペストリーを織りあげる作業、すなわち客観的に「論」の「理」（筋目）を通してひとつのかたちにすることを目指したのだと思われる。

ところがこうした研究者としての精緻な下仕事の部分はとくに学術の世界にいるわけではない読者にとっては単に煩瑣なこととして受け止

められがちになる。ともすると「誰がどういった、こういったはよいから、それによって何がいいたいのか、そのところだけを聞かせてくれ」といった短気を惹起しかねることになる。むろん三木のこだわりはとくに研究ノートとしては独我論に陥らないよう、すでに書かれてあるもの（それは他者の構想の生成物）の客觀性を拠り所に、構想力ということの筋目を織りあげていくという営みにあった。だから、「他人の論はいいから、あなたはどう思っているのか、そこを聞かせろ」というのは寿司屋に入ってきて「さくを切って並べ、時に握って出すだけだから寿司屋は気楽な商売だ」と放言するようなものになる。それは店構えの細部にわたる目配りや、地道な下仕事の徹底のもとでできあがる客前での最後の一仕事に光輝を放つ寿司のその輝きだけに触れて楽しむ客人特權としては野卑の最たるものいいであり、そうせざるを得ないほどの仕事ぶりに圧倒されまいと慌てた畜群悲哀の現れということにもなろう。

客とは元来弱いものだ。高貴な仕事に直に対面する客はとくにそうである。翻ってわれわれも偉大な仕事に接するそうした客人としてのわがまま勝手をしらばくれさせてもらい、研究会のレジメを制作した。すなわち屁理屈としては、三木の素材選びに始まる一連の下仕事の過程もそれによって彼自身のいわんとすることに沿っているゆえと見切り、要約はもっぱらカウンターに現れた客前のそれをもってなしたのである。だから、まずはレジメを味見してからそのバックヤードをも知りたくなったら原本に接すれば少しさは難儀も和らぐのではないか、と思う次第なのである。

•

ところで、「すでに書かれてあるもの」はそれ自体は自然には変化しないロゴスである。誰かがこれを読み解釈しさらに新たなロゴスを生み出すとき、そこにはその生成の由縁となる大なり小なりの創造がなされる。そこには必然的にその読み書きをする人のパトスが関わることになる。その変容や創造性に関わる理知のロゴスと情のパトスという性状の異なる精神の営みが、またあらたにひとつのかたちをつくりだす

という過程に強い関心を抱き、そのプロセスを駆動するのが構想力なのだろうという着想から始まったのが三木の構想力論であった。そのため『構想力の論理』には全体にわたり通奏低音としてロゴスとパトスの統一というフレーズが響き渡る。それは文脈に応じてときに客觀と主觀、合理と非合理的、知的と感情的、空間と時間、存在と生成、イデーと実在、一般と個別といった性格の対立することがらに姿を変じて響いてくる。

そうした正反のことがらの統一という問題解決となればおのずと弁証法が浮上する。しかし、ヘーゲルに代表される弁証法はロゴスの形式主義のなかにあり、論理的構成の主觀的な和解にとどまる点が三木には不足感があった。

とくに具体的なかたちという客觀的な表現行為に働く構想力をみると、この力による身体的な制作行為には、さらにそのかたちに働きかけてかたちを変じていくという先々への連続性を駆動するところがある。つまりここでかたちは無常のものとしてある。ある一点で捉えれば、その時空が交差した一回性の生成や創造は見いだされるが、それは点であるかぎり空点である。それがかたちの現成であるかぎりは線となってつづしていく。その線化を構想力が担っている。それは構想力がロゴスとパトス（典型的には思い、残念、意志、情熱）を弁証法的に紡ぐ働きをもつからだが、ここに単なる正反の克服による合に至り留まることのない力の性状があらわれ、未来へと歴史を開く別種の弁証法を見るのである。

三木は何度も弁証法的な統一という表現を使うが、それを実現している力には構想力を見定め、その構想力が働く場を人の頭の内から外へと延伸した。カントは観念論の限りで感性と悟性の架橋として多分に想像力と重なる構想力をみていた。しかし三木はその力をそこからむんずと外へと引っ張り出したのである。それによって主体内の観想の統一では和解できない行為や創造が関わる具体的なかたちの動態として弁証法をみることになった。そこはロゴスとパトスを基本的には合として昇華しきれない場であり、いつも統一への営みは余すところが

残されつづける。だが、その残念なところに目をつむったり切り捨てるのをせず、そこには日本構想学会のごとく未完成の動態、常なる緊張ゆえ人々への創造につなげる正反を携えたままのかたちの生成をみることになる。構想力はその重荷を引き受け先導しつづける力としてある。ここには三木の考察から2、30年後に登場するT・W・アドルノの否定弁証法を先取りした発想もみることができる。ただし三木が構想力にみた弁証法は否定しつづける前進ではなく、合しない不足を幾らかでも漸進的に充たしながら変容しつづける前進であり、それを彼は創造的弁証法と呼んだ。ここにみる頭脳遠心、すなわち個人から環境への超越こそ構想力論において三木が果たした最大の貢献であったといえる。この超越によってパトスにおける自由意志とロゴスにおける因果決定が寄り添う契機も与えられた。

この超越はそれだけでも大仕事であったが、さらにその仕事を引き継ぐ者としては三木の果たし得なかつたことを引き受ける使命を担うことになる。すなわち構想力という力は生成されるものとしてのかたちにもおのずとたたみ込まれる。それはそのかたちを変じたり創りだす力と同質にして同量の力、ないしはそれ以上のものとして注がれうるから、これもまた構想力と呼ぶに憚るところはない。だから、これを構想力第二（略称K2）と呼ぶことにしよう。三木が頭の外に引っ張り出した構想力のほうは、これと区別して構想力第一（略称K1）と呼ぶことにする（この呼称は著作『構想力の論理 第一』と同第二と紛らわしいが、むろん無関係であり、むしろそこに緊張を喚起させながらそれらへのオマージュとしてあえて使うのである）。

構想力第二に相当するものは20世紀の後半に別の文脈における概念として話題になったアフォーダンスに近い。その知覚や身体に連続する外部にあるものごとの意味と価値は、わた

ちたちが環境や文化と呼ぶ場におけるそれである。だからこんにちからおよそ一世紀前に書かれた『構想力の論理 第一』を振り返ると、それは神話、制度、技術という観点から、のちのP・ブルデューが語った客体化、制度化、身体化される文化資本の意味と価値の生成を構想力の働きにおいて捉えていたのだということもみえてくる。

よく知られているように『構想力の論理』は全体としては著者のあまりに不運な永眠により未完になった。その第三になるべき著述の問題対象は「言語」になろうことがその『第二』の末尾で予示されていた。だが、同書で三木が「言語」ということばを用いた箇所は20回程度で意外に少ない。単純にその使用頻度だけを比べると「環境」はその10倍ほど多く使われており、直接的に構想力との関係においても繰り返し語られているので印象にも強く残る。だから勝手ながら思うのである。この未刊の書を引き継ぎ、もし構想力の論理第三を綴るとなったら、おのずと言語が焦点のひとつになりつつもそれはK1とK2との循環に光を投じた「環境」が章題となつのではないかと。仮にわたしがその役回りを買って出るとすればそうなることが自然であるように思っている。

参考文献

- 大峯顕 2001『京都哲学叢書 18 三木清 創造する構想力』燈影舎。
 北京一 2025「研究会：三木清『構想力の論理』の構想を構想するの会で使用したレジメ」構想,11,29-75.
 三木清 1939『構想力の論理 第一』岩波書店。
 三木清 1946『構想力の論理 第二』岩波書店。
 三木清 2023『構想力の論理 第一』岩波文庫 岩波書店。
 三木清 2023『構想力の論理 第二』岩波文庫 岩波書店。

2025年11月30日 受稿